

イマーム・レザー廟の 研究部門の出版物をめぐって ——同廟の歴史に関する研究書の紹介

杉山 隆一

早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

イラン・イスラーム共和国ラザウィー・ホラーサーン州マシュハド市に位置する十二イマーム・シーア派（以下、シーア派と略記）第八代イマーム、レザー‘Alī b. Mūsā al-Riḍā/Emām Rezā (d. 818年)¹の廟は、イラン唯一のシーア派イマーム廟として、またシーア派信徒の参詣の対象として、現在に至るまで大きな重要性を持ち続けている。特にイランにおける20世紀以降の国民国家の形成過程の中で、同廟はそれまでに蓄積されてきた不動産を中心としたワクフ財の新たな形での開発、さらには長い歴史の中で形成されてきた宗教複合体の機能の拡張等を行いながら、経済、教育、宗教宣伝等様々な分野での事業を新たに推進していることで知られる²。

同廟が展開するこうした多様な活動のひとつに、研究・出版活動がある。この活動は1979年のイラン・イスラーム革命前からすでに行われており、当時はイマーム・レザーの墓廟は知の中心 *kānūn-e faẓīlat* であるという考えに基づいて同廟の宗教・文化事業が展開されていた [Enteshārāt-e Āstān-e Qods-e Razavī (ed.) 2537sh. 204]。但し、この当時には研究・出版を専門に扱う部署はなく、出版業務は附設のレザー廟図書館 *Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razavī* の管轄であった [‘Oṭārudī 1386kh. vol.1 429]。中でも研究関連の書籍については、主にシーア派の著名ウラマーやマシュハドのフェルドゥスィー大学 *Dāneshgāh-e Ferdowsī* の研究者らによる成果の出版が見られた。その代表例として、学術雑誌 *Nāme-ye Āstān-e Qods* の刊行³が挙げられる [Enteshārāt-e Āstān-e Qods-e Razavī (ed.) 2537sh. 204]。

イスラーム革命後になると、廟自身が研究・出版に特化した附属の組織を新たに創設する。まず

は1984/1363kh.年にイスラーム研究財団 *Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī* が設立される。イスラーム文化の普及と研究書出版のための学問的な研究を目的として掲げるこの財団は、現在廟の最高意思決定機関である文化高等委員会 *Showrā-ye ‘ālī-ye farhang* の管轄下に置かれ、宗教学院 *hōwze*⁴ や大学の研究者の協力を得ながら活動を展開している [Darbāre-ye mā: Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī]。なお、同財団には出版部門が設けられており、その研究活動の成果の多くは同部門から出版されている。加えて、1994-95/1379kh.年には図書館・博物館の管理を担うレザー廟図書館・博物館・文書センター機構 *Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Razavī* にも研究部門が設立された。同機構の研究部門でも、外部の研究機関や大学等と連携し、図書館所蔵史資料、文書等を用いた研究を推進している [Pazhūhesh: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād]。この機構も出版部を有し、これまで多数の研究成果を刊行してきた⁵。

上記2つの研究部門の活動の中で重要な位置を占めるのが、レザー廟およびマシュハドの歴史研究に関する研究書の刊行である。中でもレザー廟は、主にサファヴィー朝期以降の古文書を多数収蔵することで知られており、この文書群を利用した研究成果の出版が注目に値する。特にレザー廟の運営に関する文書群の大多数は、元々同廟図書館に保管されていたわけではなく、1984/1363kh.年にハラム内のある居室から偶然発見されたものである。その後これらの文書群は図書館に移管され、新たに設立された文書局 *edāre-ye asnād* により整理が進められてきた [Mo‘arrefī-ye edāre-ye asnād 1381kh. 287-290]。

同図書館に所蔵される文書だが、レザー廟に関する文書については、先述の運営に関連する文書群を含め、サファヴィー朝期からガージャール朝期までに作成された約28万点を所蔵する。さらに同図書館の収蔵文書は、レザー廟関連のものに留まらない。その他の文書コレクションとして、著名な家および個人、殉教者財団 Bonyād-e shahīd に関連する文書群が挙げられる。特に著名な家系に関する文書群については、ホラーサーン地域一帯のみならず、スイースターンなどのイラン東部地域に関係する文書約18万点、さらに約5千点の写真を所蔵している。さらに文書局は写真、映像資料の収集・管理も行っている [Mo'arrefī-ye edāre-ye asnād 1381kh. 290-292]。文書をはじめとしたこれらの史資料の研究の中核を担ってきたのが先述のイスラーム研究財団およびレザー廟図書館・博物館・文書センター機構である。両組織は2000年代に入ってから徐々に研究活動を活発化させてきており、その成果は主に同廟より書籍の形で刊行されている。

以下、イスラーム研究財団およびレザー廟図書館・博物館・文書センター機構によって、2000年代以降現在に至るまでに同図書館所蔵史資料を利用して出版された同廟の歴史に関する研究書のうち、本稿筆者が実際に目を通した中で主要なものとする10タイトルを紹介する。なお、以下で取り上げる研究書に関しては、本文中の各書籍の冒頭部において著者のカタカナ転写と書籍名の翻訳、ならびに末尾に書誌情報の略号を記す。完全な書誌情報については本稿末尾の参考文献リストを参照されたい。

I. 『文書帳簿』第1巻～第4巻

[Edāre-ye asnād (ed.) 1381kh.] [Ṭalā'ī (ed.) 1385kh.]
[Ṭalā'ī (ed.) 1387kh.] (計3冊)

本論集は主にレザー廟の運営に関連する文書史料の紹介ならびに同史料に基づく研究論文を掲載したものである。2002/1381kh.年に第1巻 [Edāre-ye asnād (ed.) 1381kh.] の刊行が開始され、その後第2・3巻 [Ṭalā'ī (ed.) 1385kh.] が2005/1385kh.年

に合併号の形で、2008/1387kh.年に第4巻 [Ṭalā'ī (ed.) 1387kh.] が出版されたが、5巻以降は刊行されていない。

本シリーズに収録される史料紹介ならびに論文の中で興味深いものとしては、前者には、パフラヴィー朝初期のケシクの規約 nezāmnāme がある [Hoseynī 1381kh.]。また、廟の財務文書史料であるアヴァールジェ avārje 文書⁶を扱ったもの [Shūreshjānī 1387kh.] もある。ガージャール朝期の廟の灯りに関する文書史料の紹介 [Ṣabetniyā and Sūzanchī-Kāshānī 1381kh.] もあり、この史料紹介はすでに外国人研究者の論考にて参照されている [Werner 2015 93-113]。後者に関しては、サファヴィー朝期からガージャール朝末期までの参詣者歓待所 mehmānsarā [Sūzanchī-Kāshānī 1381kh.]、サファヴィー朝期における病院 [Shahīdī 1387kh.]、水場 saqqā khāne [Maḥbūb 1385kh.] といった廟の宗教複合体を構成する諸部門のあり方を文書に基づいて考察した論考などがある。その他、同廟の女性職員の実態に言及した [Ṭalā'ī 1385kh.] も注目に値する。その他、レザー廟の官職の考察や廟ならびにマシュハドの写真の紹介など、本論集にて言及されるテーマは多岐に渡っている。

II. マフムード・バサンディーデ (編)

『ホラーサーンの宗教学院——

第1巻 マシュハドの宗教諸学院』

[Pasandīde (ed.) 1385kh.]

タイトルに第1巻とあるが、全2巻の出版を予定している書籍である。本書の表題ならびに第2巻にて含まれる予定の内容(ホラーサーン各州諸郡部の宗教学院を扱う予定)を併せて考慮すれば、ホラーサーン地方各地に所在する各宗教学院の歴史・現状をまとめた研究になるはずである。しかし、第2巻は現在まで未刊行であるため、本稿における紹介は第1巻のマシュハドの宗教学院の部分のみとなる。第1巻は前ワクフ管財人ヴァーエズ・タバスィー Vā'ez Ṭabasī (1935/1314kh.-2016/1384kh.年) が寄稿したマシュハドの宗教学院の歴史に関する序文と著者執筆の5章から構成され、1章は研究の目的、2章はマ

シュハドの宗教学院の歴史の概論を扱う。続く3・4・5章において、現在に至るまで設立されたマシュハドの宗教学院82校のひとつひとつにつき、現存しないものも含めて、それぞれの歴史、建築、附属施設、教育、ワクフ等の情報を可能な限りまとめている。

マシュハドの宗教教育の歴史は、同書によれば818年のイマーム・レザーの死後から廟のそばでウラマー、サイイドらが集い、教育が行われたのがはじまりとのことである。その後、ティムール朝期にハラム *ḥaram* 内に3つの宗教学院（バラールサル *Bālāsar*、パリーザード *Parīzād*、ド・ダル *Do Dar*）が創設され、廟は宗教複合体へと変貌を遂げていく。これ以降、マシュハドの宗教学院は時代を経るごとにハラム内外にその数を増やしていくことになる。4章以降では近代以降に設立された宗教学院の歴史と現状が述べられるが、20世紀以降におけるレザー廟附設の宗教教育も行う大学の設立など、現在に至るまでの宗教学院の変化についても言及がある。

マシュハドの宗教学院はアリー・ハーメネイー *‘Alī Khāmene’ī* 最高指導者、さらには現在のシーア派世界において最も崇敬を集めるマルジャ・アッ=タクリード、アリー・スィースターニー *‘Alī Sīstānī* 師が若き日に勉学で励んだことで知られ、ゴム *Qom* とは異なった存在感を有している。また女子宗教学院についてまとめた箇所もある。マシュハドにおける宗教教育、およびレザー廟の発展過程の一部としての廟附設の宗教学院の歴史と現状の概略を知る上で参考になる研究書と言えよう。

Ⅲ. ジャハーンプール (編)

『文書に基づくレザー廟の古いマクタブハーネと宗教学校 (サファヴィー朝 (から) ガージャール朝まで)』 [Jahānpūr (ed.) 1387kh.]

本書は二章構成であり、第一章がマクタブハーネ *maktab-khāne*、第二部が宗教学院 *madrese* に割り当てられ、双方においてそのイランならびにレザー廟におけるその歴史、さらにはレザー廟に所蔵される文書から見たその運営の実態を描き

だすという形を取っている。第二章の宗教学院に関して、実際の文書に基づく考察の対象となるのは、ファーゼル・ハーン宗教学院 *Madrese-ye Fāzel Khān* となっている。関連する文書は1603-04/1012h.q.年から1915-16/1334h.q.年までの間の約6000枚が現存しているという。なお、本書における叙述の分量は第一章の方に多くの比重が置かれている。

第一章で扱われるレザー廟のマクタブハーネについて、本書の著者は *Tārīkh-e ‘Ālam-ārā-ye ‘Abbāsī* の記述に基づきシャー・タフマースプ *Shāh Tahmāsp* (r. 1524-1576) が男女それぞれ40名の孤児の養育のために創設したものがそのはじまりであると指摘する [Jahānpūr (ed.) 1387kh. 37-38]。その後複数のワクフ寄進によってサイイドの孤児の養育も行われ、さらにガージャール朝期になるとマクタブハーネの数が合計3校へと増加するなど、その機能と規模は時を追って拡充されていく。著者は、廟に残された文書からこのマクタブハーネにおける孤児たちへの食事・衣服の提供や、教員の給与のデータなど、孤児たちの暮らし・教育から、組織の運営に関するまでの多種多様な情報を可能な限り抽出しようと試みている。興味深いのは、事例はガージャール朝後半期のものとなるが、孤児たちへの教育に利用された書籍が挙げられている点である [Jahānpūr (ed.) 1387kh. 44-48]。聖典クルアーンやその他の宗教関連書籍、宗教学院でもテキストとして用いられるアラビア語の文法・統語論に関する書籍のみならず、ミールザー・メフディー・ハーン *Mīrzā Mehdī Khān* 作のナーデル・シャーの事績を綴った *Dorre-ye Nādere* といったイラン地域の歴史に関する書物、サアディー *Sa‘dī* の *Golestān* といったペルシア語の詩集などがその中に含まれている。19世紀のマクタブハーネでは宗教学院で用いる諸学問のテキストに加え、10歳以下の生徒にはペルシア語の詩の学習も課されていたと言われる [Dūstq‘āh and Yağmā’ī 1997]。廟のマクタブハーネの教育の内容は大枠では他のものと共通点が多いと考えられるが、詳細な比較を行えばその特色を浮き彫りにすることが可能であろう。

第二章で扱われるファーゼル・ハーン宗教学

院はサファヴィー朝後期の創建であり、創設者ファーゼル・ハーンは、マシュハドにおける著名な教師modarresとして知られた人物である。建物自体はシャー・アッバース2世 Shāh ‘Abbās-e s̄ānī (r. 1642-1666) 期の1664-65/1075h.q.年に完成したことが伝えられている。この宗教学院の特色としては、マシュハドにおいてレザー廟に次ぐ規模の図書館を有していた点が挙げられよう [Jahānpūr (ed.) 1387kh. 141-142]。本書の中で同宗教学院に関して挙げられている文書はガージャール朝後期のもののみだが、当時のこの宗教学院の教師や図書館員といった職員の給与や、建物の居室 ḥojre 数、学生たちの生活の状況といった興味深い情報が文書から垣間見える

なお、本書には第一章、第二章に関する一部の文書の翻刻が各章の末尾に、さらに写真版が書籍の最後に掲載されている。文書の形式や記載の具体的な内容を知るのに有用である。

IV. ラバーベ・モオタゲディー (編)

『文書選集——サファヴィー朝からガージャール朝期までのレザー廟のファルマーンとラガム』 [Mo'taqedī 1387kh.]

レザー廟図書館に所蔵されている文書のうち、ファルマーンの類はブッセ [Busse 1959]、タバータバーイー [Ṭabāṭabā'ī 1352kh.] などによって、革命以前から翻刻・出版が進められてきた。革命を経て2000年代後半以降になると文書の翻刻・出版が徐々に見られるようになる。書籍の形態では、寄贈によってレザー廟図書館に収蔵に至ったホラーサーン地方に関するファルマーンやワクフ関係の文書73点の翻刻をまとめた [Ṭalā'ī 1380kh.] がその嚆矢であろう。

本書は、シャー・アッバース Shāh ‘Abbās (r. 1588-1629) の1599/1008h.q.年のファルマーンから、アフマド・シャー Aḥmad Shāh (r. 1909-1925) の1918/1336h.q.年のファルマーンまで、レザー廟に関連する70点の文書の翻刻を掲載している。収録文書の年代別傾向としては、ガージャール朝期のものが58点と多くを占める。収録文書の内容は同廟のモタヴァッリーバーシー Motavallī-bāshī 以下

の諸官職の任命文書、職員への給金の支払、ワクフ財の賃貸・税など、多岐に渡っている。廟運営の解明等、多様な用途が考えられる史資料集と言えよう。

V. アボルファズル・ハサンアーバーディー 『マシュハドにおけるレザー裔サイド—— 登場からガージャール朝末期まで』

[Ḥasanābādī 1387kh.]

表題の通り、マシュハドのサイドのレザー裔につき、そのマシュハドへの到来からガージャール朝末期までの活動について、ガージャール朝期作成の史料 *Shajare-ye Tayyebe* [Razavī 1384kh.]⁷ やレザー廟図書館所蔵の文書史料等から多くの情報を収集し、その活動を描きだした研究書である。同書によれば、マシュハドへのレザー裔サイドの到来はティムール朝第3代君主シャー・ロフ Shāh Rokh の治世 (r. 1409-1447) のミール・シャムス・アッ=ディーン・モハンマド・ラザヴィー Mīr Shams al-Dīn Moḥammad Razavī、ならびに同王朝末期ヘラート宮廷君主のホセイーン・バーイガラー Ḥoseyn Bāyqarā の治世のラズィー・アッ=ディーン・モハンマド Razī al-Dīn Moḥammad であると言われる。本書では、特にレザー廟のモタヴァッリー Motavallī 以下の諸官職に就任したレザー裔の成員、ならびに彼らによる多数のワクフに関し、文書の写真版と翻刻を示しながら解説が示される。このうち前者のレザー廟の官職に関する事柄では、廟の現場管理部門とも言えるケシク keshīk の責任者 sar-e keshīk (ケシク長) とケシクに配置される従者 khādem、さらには財務関係では出納長 taḥvīldār など、上述のレザー裔が就任した多数の官職の職掌と就任者に関する説明が加えられている。

本稿著者が本書の中で注目するのは、本文中で文書のひとつとして紹介され、表紙としても利用されている1912年3月29日/1330h.q.年4月10日のロシアによるレザー廟ハラム爆破事件⁸を描いた絵である [Ḥasanābādī 1387kh. 121-127]。この絵は、後述するように写真技術導入以後のものであり、さらには大英図書館にも同じものが所蔵さ

れているため、その価値は高いとは言い難いが、当時のハラム及びこの事件の様子を記す絵画史料としては有用である。同様のガージャール朝以前の廟のハラム内部を描いた絵が文書コレクションの中にもし残されているのであれば、史資料として研究に非常に役立つものとなろう。

VI. アミールザーデ・ゲロウ

『レザー廟（ガージャール朝期のレザーの聖なる敷居）への参詣と参詣者』

[Amīrzāde Gerow 1393kh.]⁹

本書はその書名の通り、ガージャール朝期のレザー廟参詣の実態を明らかにしようとした研究である。五章構成の本書は、第一章が都市マシュハドならびにレザー廟参詣の歴史の概説、続く二章目は参詣の旅とマシュハドの参詣者を対象としたワクフ、三章目は出身地別の参詣者の動向、四章目は主に社会層別に見る参詣者の動向と扱い、最終章ではマシュハドでの宿泊や慈善を取り上げている。本書の特徴は、同廟所蔵の文書に基づいて参詣者の多様性や受け入れなどの事例の提示を行っている点にあると言えよう。三章目で扱われる参詣者の出身地は、コーカサス、インド、アフガン、イラク、バフレイン、レバノン、そしてイランとシーア派が一定数暮らす地域となっている。四章目ではベクターシュ Bektāsh¹⁰、ネエマトラー Ne'matollāh¹¹のスフィー・タリーカ、女性、サイイド、商人、宗教学院の学生、障害者などに分けた形で参詣者のあり方がまとめられ、他には見られない独自の情報が見られる。

VII. レザー・アンジャービーネジャード他(編)

『ホラーサーンの20のワクフ文書』

[Anjābī-nezhād, 1388kh.]

そのタイトル通りレザー廟ならびにホラーサーン地方に関連する20のワクフ文書の翻刻・校訂および解説を掲載した書籍である。時代別の内訳は、ティムール朝シャー・ロフの妻ゴウハル・シャード Gowhar Shād(d. 1457年)のワクフ文書(1426/829h.q.年)を筆頭に、ティムール朝期1点、

サファヴィー朝期14点、アフシャール朝期1点、ガージャール朝期4点となっており、最も年代の新しいものはハーッジ・ファラーマルズ・ハーン・サブザヴァーリー Hājī Farāmarz Khān Sabzavārī¹²の文書(1874-75/1291h.q.年)となっている。

レザー廟関係で言えば、現在に至るまで最大規模のワクフ寄進のひとつに数えられるアティグ・モンシー 'Atīq Monshī(1525/931h.q.年)¹³をはじめに、クルド系武将ギャンジュ・アリー・ハーン Ganj 'Alī Khān(1599/1008h.q.年)、さらにナーデル・シャー Nāder Shāh(1732/1145h.q.年)らのワクフ文書を含む。上述のアティグ・モンシーのワクフなど、これまでに出版されることのなかったワクフ文書の翻刻・校訂を掲載している点で有用と言える。

VIII. マフムード・バサンディーデ

『マシュハドの宗教学院の文書とワクフ』

[Pasandīde 1394kh.]

本書は、先述の『ホラーサーンの宗教学院：第1巻 マシュハドの宗教諸学院』[Pasandīde (ed.) 1385kh.]と同一の著者による研究室で、ティムール朝期からガージャール朝期までの間に設立されたマシュハドの宗教学院13校のワクフ文書の翻刻とワクフ財のデータ、付随する文書から得られた運営についての情報、解説などを掲載している。

本書では、まずその序文 [Pasandīde 1394kh. 7-9]にて、宗教学院をワクフ対象としているワクフおよびその関連文書が運営面について記す情報の特徴について簡潔に述べる。その特徴としては、教師、図書係 ketābdār、出欠記録係 ghāyeb-nevīsなどの宗教学院に設けられている官職やその給与、学生の数とその奨学金、就学期間、アーシューラーの開催方法などが挙げられている。

本題とでも言うべきワクフ文書の翻刻そのものについては、前述のティムール朝期に創建されたバーラーサル、およびパリーザードの各宗教学院のものから、ガージャール朝ファトフ・アリー・シャー Fath 'Alī Shāh (r. 1797-1834) 期設立のハーッジ・アーガー・ジャン宗教学院 Madrese-ye Hājī Āqā Jān¹⁴までのものが掲載されて

いる。宗教学院によっては、創建以後に追加されたワクフ文書の翻刻も掲載しており、ワクフの観点から宗教学院の拡大・変容の過程を検討する材料にもなる。

**IX. ベフザード・ネマティー、メフディー・ハーシェミー
『イマーム・レザーの清浄なるハラムと
マシュハドの歴史写真選集』**

[Ne'matī and Mehdī (eds.) 1395kh.]

イランにおけるはじめての写真撮影は1844年にタブリーズにおいて行われた [Afshar 1997 262]。レザー廟においては、ナーセロッディーン・シャー Nāṣer al-Dīn Shāh (r. 1848-96) の最初のホラーサーン行幸 (1866/1283h.q.年) 時の同廟参詣の際に、当時の宮廷の写真部門長 'Akkās-bāshī であるアーガー・レザー・ハーン Āqā Rezā Khān Eqbāl al-Saltāne がはじめて写真を撮影したと言われる [Fadavī 1395kh.]。

その後、レザー廟も宗教儀礼や要人訪問の記録のために写真の活用を決定し、王朝の宮廷同様に写真部門長職を設置する。その確認しうる最古の人物としては1903/1321h.q.年に同職に就任していたミールザー・レザー Mīrzā Rezā なる人物である [Fadavī 1395kh.]。以降、同廟は廟の建築物のみならず、附属の施設、さらにはマシュハドの貴顕たち、さらには市内および近郊の様々な建物の写真を数多く撮影し、図書館に保存してきた。その数は2万4千点にも及ぶ [Mo'arrefī-ye edāre-ye asnād 1381kh. 292]¹⁵。

本書はレザー廟の建築物やマシュハド市内外の廟に関係する箇所等に関し、19世紀末以降から革命直前の1970年代までの間に撮影され、同廟図書館に所蔵されている写真の中から237点を選んで出版したものになる。写真については、ハラムの内部、ハラムの周辺域、マシュハドの市街地、郊外と4つに分類され、その分類の中でさらに場所・建物ごとに項目が設けられる形で掲載されている。そのひとつひとつの項目に撮影時期の異なる複数枚の写真と解説が付されており、当該の時期におけるレザー廟ならびにマシュハド市内外の拡大と変容を知る上で便利である。

X. イスラーム研究財団、辞書グループ (編)

『レザー廟大辞典——第1巻 alef-sīn』

[Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī, gorūh-e dā'erat al-ma'āref (ed.), 1393kh.]

イマーム・レザーならびに廟のハラム、また廟に関連する事柄を知り、それらの情報を遍く知らしめることを目的に、2001-02/1380kh.年にイスラーム研究財団にて編纂が開始された辞典である。編纂時に「ラカブ、官職、諸見出し語」「名士」「組織」「地名・場所」「博物館収蔵貴重品」「貴重写本・書簡」の6つのグループが生まれ、選ばれた見出し語がそれぞれのグループに委ねられて執筆が行われた。編纂作業は、見出し語の増加と多様化、ならびに前例のない辞典の執筆であったために困難を極め、多くの時間を要した、とのことである [Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī, gorūh-e dā'erat al-ma'āref (ed.), 1393kh. moqaddame]。2014-15/1393kh.年にsīnまで収録した第1巻が刊行されたが、後に続く巻は本稿執筆時 (2017年12月) で未刊である。

この第1巻は、青い装丁で全頁カラー刷りという豪華なものに仕上がっている。当然、写真・図版もカラーで見やすい。最初の項目はイマーム・レザーからはじまるが、以下アレフバー順に見出し語が並べられている。第1巻の見出し語に関しては、廟運営に携わった歴史上の人物から、建築、所蔵美術品、附属の組織、廟の儀礼・サービス、さらには20世紀以降刊行された廟に関する研究書まで、実に多様な項目が挙げられている。本稿の筆者は自らの研究との関連において、歴史上の廟組織や個々の官職に関する多くの見出し語が立てられている点を興味深く感じた。こうした項目は、廟所蔵の文書を基にして執筆されている点で他に見られない情報を提供している場合があり、研究を進める上で今後必ず参照すべきものであると考えられる。

ここまで、レザー廟に関して廟の出版部から近年出版された注目すべき研究書を紹介してきた。最後に、上記の書籍にある程度共通して見られる問題をいくつか指摘してみたい。

まず気になるのは、上記の研究書の著者たち

は、自国における先行研究を十分に参照していない点である。例を挙げれば、先述の通りブッセの文書研究に掲載されている3点のサファヴィー朝期におけるレザー廟関連の文書 [Busse 1959 187-189, 204-207, 215-217] (文書No.11, 17, 21) だが、同書の出版後、現地イランでも数度翻刻がなされ、タバータバーイーのマシュハドおよびレザー廟関連の文書翻刻 [Ṭabāṭabā'ī 1352kh.] (文書No.1, 4, 5)、ならびに本稿で取り上げた [Mo'ṭaqedī (ed.) 1387kh. 20-26] (文書No.2, 3, 4) にも掲載されている。但し、タバータバーイー以下の現地の研究は、ブッセによる翻刻の問題を指摘しながらも、その具体的な誤りの箇所については言及がない。さらに [Mo'ṭaqedī (ed.) 1387kh.] は、[Ṭabāṭabā'ī 1352kh.] の存在自体に言及しておらず、前者のブッセと重複する文書は先行研究の問題点を踏まえた形での翻刻にはなっていない。加えて、タバータバーイー、モタゲディー両者の翻刻には細部に違いが見られる。

加えて、ワクフ文書の翻刻・校訂でも同様のことが言える。こちらも例を示せば、アンジャビーネジャド [Anjābī-nezhād 1388kh. 11-37] に掲載されている有名なティムール朝シャー・ロフの妻ゴウハル・シャーのワクフ文書は、同書出版までも [E'temād al-Saltāne 1362kh. vol.1 441-445] や、[Seyyedī 1386kh.] などで校訂がなされている。特に [Seyyedī 1386kh.] は文書の解説ならびにワクフをめぐるその後の歴史を非常に詳細な形で記載している。しかし、当該のアンジャビーネジャドの校訂は、ワクフ文書の紹介や文書内の単語の解説を独自の形で付してはいるが、先行する校訂の問題点に関する指摘は一切ない。このような先行研究を参照していない事例は他にも見られる¹⁶。また、先述のファーゼル・ハーン宗教学院のワクフ文書に関しては、[Anjābī-nezhād 1388kh. 164-178] および [Pasandīde 1394kh. 61-77] 双方にその翻刻が掲載されている。しかし、後者の翻刻は、注記はあるものの前者の翻刻をそのまま載せているに過ぎない。その他、後者に掲載される宗教学院関連のワクフ文書は前者と重複するものがあるが、前者の問題点には言及がない¹⁷。

文書を再度翻刻・校訂している事例に関して

は、先行研究の何が問題であったのかに関する指摘がないため、これまでに公刊されたもののうちのどの翻刻・校訂が一番信頼に足るのかは、実際にテキストを比較しながら個々に判断していく必要がある。この点は大きな問題であろう。また、特に [Anjābī-nezhād 1388kh.] [Pasandīde 1394kh.] はワクフ文書の翻刻・校訂出版を主眼にした書籍であるがゆえに、先に示された翻刻・校訂の再録や先行研究の問題点への指摘を欠いた形で新たな翻刻・校訂を提示することに意義があるとは思えない。

加えて、本稿で取り上げた研究には、内容の誤りや、踏み込んだ分析を欠いたもの、さらには典拠が不明なものも見られる。例えば、『文書帳簿』誌第2号に収録されているサファヴィー朝期のレザー廟の歴代モタヴァッリーバーシーのリスト [Ḥasanābādī 1385kh.] は、一部の同職への就任者や在職年代などいくつかの点で矛盾点や誤りを含んでいることが [Talaee 2014 206 n.14] にて指摘されている。また、本稿筆者の興味関心からの指摘になるが、『レザー廟大辞典』の項目「レザー廟：職掌、組織、官吏 Āstān-e Qods-e Razavī, pīshīne va tashkīlāt, mā'mūr」 [Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī, gorūh-e dā'erat al-ma'āref (ed.), 1393kh. 40-57] では、アフシャル朝以降の各王朝及びイスラーム共和国期の特定の年代における廟の組織図が記載されている。規約が作成される19世紀以前のそれぞれの王朝の時代の組織図に関しては、すべて年代が記載されているにも関わらず、作成に利用した史資料の典拠は一切記されていない。この項目は特に前近代の箇所について所蔵文書資料から先行研究には言及のない指摘を含むだけに、組織図作成の典拠が不明なのは惜しまれる。加えて、この項目に関しては、辞書項目のため仕方がないことかもしれないが、レザー廟の組織に関して生じた歴史上の諸変化について、その背景まで踏み込んだ分析は見られない。また、本項目での近代以降に関する言及については、廟所蔵の史資料は典拠としてほとんど参照されず、多くを廟の歴史・組織をまとめた概説書に負っている。同様の分析の欠如については、[Ḥasanābādī 1387kh.] [Amīrzāde Gerow 1393kh.] などでも見ら

れる。前者ではレザー廟の個々の官職の成立の要因やその職位に就くレザー裔成員の時代ごとの増減といった変化の背景、後者では多様な集団に属する参詣者がレザー廟を目指した時代別の要因(参詣路の安定、など)といった点に関する検討が必要であるように思われる。

本稿で取り上げた研究書に関しては、以上のような共通した問題点が指摘できる。しかし、これらの書籍は外国人研究者にとって利用が未だあま

り容易でない文書等の史資料を駆使した貴重な研究であり、レザー廟ならびに都市マシュハドの研究にまず参照すべき文献であることに疑いの余地はない。ただ、本稿で指摘したような問題となる点も含まれるため、国内外の研究者が必要な批判を加えながら、個々の研究に利用していくことが望まれよう。レザー廟図書館の非常に貴重な史資料に基づく現地の研究が、今後ますます発展し、さらなる広がりを見せていくことを期待したい。

註

- 1 本稿での暦の表記は、原則として西暦で行う。但し、西暦に加えてイラン暦、またはヒジュラ暦の表記の必要がある場合は、西暦／イラン暦、あるいは西暦／ヒジュラ暦の形で双方の暦を併記する。なお、イラン暦にはkh、ヒジュラ暦にはh.q、イラン皇帝暦にはsh.の略号を付す。また、参照文献の箇所では、引用文献の書誌情報そのものにイラン暦しか記載されていない場合、西暦の記入は省略する。
- 2 現代の同廟の活動の全体像については、拙稿 [杉山 2016] にて検討している。
- 3 1960-1974/1339-1353kh.年の間に最後の特集号を含めて全35号が刊行された雑誌である。主に廟ならびにマシュハドに関する論考を掲載している。
- 4 本稿では、歴史上のmadreseならびに現代のhowze双方の語に「宗教学院」の訳語を用いている。
- 5 他、同廟の印刷出版活動を専門に扱う部署として、レザー廟印刷出版機構Mo'assese-ye chāp va enteshārāt-e Āstān-e Qods-e Razavīなる組織が1984/1362kh.年に設立されている。同機構は、イスラーム学の分野ならびに大学および宗教学院の需要を満たす書籍の出版、レザー廟関連ならびに政府系の組織への診察出版サービスの提供を目的に掲げ、特に現在では年間500万冊という中東最大のクルアーン印刷部数を誇っている [Bonyād-e pazhūshhā-ye eslāmī, gorūh-e dā'elat al-ma'āref (ed.), 1393kh. 325-326]。これらの研究機関の出版物の実際の印刷を担当するのがこの機構である。
- 6 このアヴァールジェ文書とは、税の納付状況と財務部局における支給額・消化状況を記録する貸借対照表的な機能を持つ帳簿である。14世紀以降になると、各種財源の消化状況を監視する帳簿として重要な役割を担うようになる [渡部・阿部 2017 391-392]
- 7 本書の著者モハンマド・バーゲル・ラザヴィーMoḥammad Bāqer Razavī(1853/1270h.q.-1924/1342h.q.年)は、マシュハド生まれのレザー裔のウラマーで、レザー廟で教師や従者khādemを務めた人物である [Razavī 1384kh. 37-44]。この史料は、ガージャー朝期1914-15/1333-4h.q.年頃に完成したサイドのレザー裔の系譜、ならびにこの一門の中で卓越した人物の経歴等をまとめたものである。関連するワクフや官職への任命文書の写しが大量に挿入されている点で価値は高い。
- 8 立憲派と反対派が武力衝突を繰り返していたマシュハドの治安回復を口実として、ロシアが1912年1月21日／1330h.q.年1月31日に同市に200名の兵士と大砲を送り込み、その後西暦の同年3月29日に臣民庇護を掲げてハラムに突入し、64名が死亡した事件のことである [Hasanābādī 1387kh. 121-127]。なお、本書の著者は当該の部分でこの事件が発生した西暦の年代を1911年としているが、換算ミスであろう。
- 9 本書のタイトルは表紙と内部の書誌情報の箇所とで異なった形で記載されているが、本稿では書誌情報に記載されているものに従う。
- 10 13世紀のホラーサーン出身のハッジ・ベクターシュHājī Bektāshを名祖とするスーフィー・タリーカでシーア派的傾向を有しつつオスマン朝治下のアナトリアなどで勢力を拡大していったことで知られる。本書では、1882-83/1300h.q.年前後にアナトリア方面からレザー廟への参詣へとやってきた人々の事例を紹介している [Amīrzāde Gerow 1393kh. 133-136]。
- 11 14世紀にネェマットラー・ヴァリーNe'matollāh Valīによって創始されたスーフィー・タリーカで、ケルマー

- ンなどイラン南東部を中心に勢力を保った集団として知られる。本書では1882-83/1300h.q.年前後のケルマーン同タリーカからの参詣者について言及がある [Amīrzāde Gerow 1393kh. 132-133]。
- 12 同書の解説によれば [Anjābī-nezhād 1388kh. 275]、この人物はサブザヴァールの村落バーガン Bāghān 出身の人物で、ナーセロッティーン・シャーの治世に百人隊長 yūzbāshī やサブザヴァールの騎兵隊長職 sarkardegī-ye savāre などを経験し、当地やマシュハドに不動産を有していた土地の名士である。
- 13 この人物はシャー・エスマーイル Shāh Esmā'īl 期に活躍した能書家として知られる一方、在職年代は不明ながらもレザー廟モタヴァッリーの職に就いていた人物である [Qommī 1352kh. 46] [Talaee 2014 206]。
- 14 同宗教学院は、ガーエム・マガーム・ファラーハーニー Qā'em Maqām Farāhānī の兄弟であるミールザー・ムーサー・ハーン Mīrzā Mūsā Khān がレザー廟ワクフ管財人在職時 (1831-32/1247h.q.年) に建設されたものである。
- 15 なお、同廟所蔵の写真のうち、著名人に関する写真を集めたものが2005/1384kh.年に出版されているが、本稿筆者は未見。
- 16 その他いくつかの例を挙げれば、本書はナーデル・シャーのワクフ文書の翻刻も掲載する [Anjābī-nezhād 1388kh. 214-231] が、この文書に関する先行研究への言及はない。この文書の写しと先行する翻刻に関しては拙稿 [杉山 2017 55 n.11] にて述べた。また、ギャンジュ・アリー・ハーンのワクフ文書 [Anjābī-nezhād 1388kh. 64-77] に関しても、[Bāstānī-Pārīzī 1362kh. 85-106] にレザー廟所蔵文書ならびにテヘラン大学所蔵写本 No.2987 を利用したと思しき校訂が掲載されているが、本書はこの校訂にも言及していない。
- 17 例えば、サファヴィー朝期後期創建のアップバース・ゴリー・ハーン宗教学院 Madrese-ye'Abbās Qolī Khān、ナツヴァーブ宗教学院 Madrese-ye Navvāb 他多数で重複が見られる。[Pasandīde 1394kh.] はワクフ文書の解説等に多くの紙幅が割かれ、[Anjābī-nezhād 1388kh.] にはない裏書などの部分の翻刻を掲載している場合があるが、基本的に前者は後者との差異に言及をしていない。

参考文献・ウェブサイト

- Afshar, Iraj, 1983, "Some Remarks on the Early History of Photography in Iran," in Edmund Bosworth and Carole Hillenbrand (eds.), *Qajar Iran: Political, Social and Cultural Change 1800-1925*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.261-290.
- Anjābī-nezhād, Rezā, et al. (ed.), 1388kh., *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- Amīrzāde Gerow, Ḥasan, 1393kh., *Ziyārat va za'erān-e Mashhad al-Rezā (Āstān-e Qods-e Razavī dar dowrān-e Qājār)*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- Bāstānī-Pārīzī, Moḥammad Ebrāhīm, 1362kh., *Ganj 'Alī Khān*, Tehrān: Enteshārāt-e asā'īr.
- Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī, gorūh-e dā'elat al-ma'āref (ed.), 1393kh., *Dā'erat al-ma'āref-e Āstān-e Qods-e Razavī*, vol.1, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- Busse, Heribert, 1959, *Untersuchungen zum islamischen Kanzleiwesen: an Hand turkmenischer und safawidischer Urkunden*, Kairo: Kommissionsverlag Sirović Bookshop.
- Darbāre-ye mā: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī, <<http://www.islamic-ri.ir/page2.aspx?np=m&yid=4>> (2017年12月17日閲覧)
- Dūstkhāh, Jalīl and Eqbāl Yaḡmā'ī, 1997, "EDUCATION iii. THE TRADITIONAL ELEMENTARY SCHOOL," in Ehsan Yarshater (ed.), *Encyclopedia Iranica*, online edition, <<http://www.iranicaonline.org/articles/education-iii>> (2017年12月26日閲覧)
- Edāre-ye asnād (ed.), 1381kh., *Daft-e asnād*, vol.1, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Razavī.
- E'temād al-Saltāne, Mīrzā Ḥoseyn Khān, 1362kh. (rep.), *Maṭla' al-shams*, 2vols, Tehrān: Enteshārāt-e yasāvōl.
- Fadavī. 1395kh. "Ḥekāyat-e 'Aks dar in qat' az behesht." (2017年1月21日 / 1395kh.年11月2日), <<http://www.aqr.ir/Portal/home/?news/130030/299022/1132670/%D8%AD%DA%A9%D8%A7%DB%8C%D8%AA-%D8%B9%DA%A9%D8%B3-%D8%AF%D8%B1-%D8%A7%DB%8C%D9%86-%D9%82%D8%B7%D8%B9%D9%87-%D8%A7%D8%B2-%D8%A8%D9%87%D8%B4%D8%AA>> (2017年10月15日閲覧)
- Hasanābādī, Abū al-Fazl, 1385kh., "Motavalliyān-e Āstān-e Qods-e Razavī az dowre-ye Šafavīye tā Afshāriye," in Zahrā Tālā'ī (ed.), 1385kh., *Daft-e asnād*, vol. 2 & 3, pp.73-142.
- , 1387kh., *Sādāt-e Razavī dar Mashhad az āghāz tā pāyān-e Qājāriye*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- Hoseynī, Seyyed Ḥasan, 1381kh., "Nezāmnāme-ye khedmāt-e keshkī-ye Āstān-e Qods-e Razavī dar sāl-e 1307sh.," in Edāre-

- ye asnād (ed.), 1381kh., *Dafter-e asnād*, vol.1, pp.11-28.
- Jahānpūr, Fāṭeme (ed.), 1387kh., *Maktab khānehā va madāres-e qadīm-e Āstān-e Qods-e Raḡavī bā takīye-ye asnād (Safavīye ta Qājārīye)*, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Raḡavī.
- Ne'matī, Behzād and Mehdī Ḥesāmī (eds.), 1395kh. *Gozīde-ye 'akshā-ye tārikhī-ye Ḥaram-e Moṭahhar-e Emām Rezā va Mashhad*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī, Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Raḡavī.
- Maḥbūb, Elāhe, 1385kh., "Saqqā' va saqqā' khāne dar ḥaram-e Raḡavī," in Zahrā Ṭālā'ī (ed.), 1385kh., *Dafter-e asnād*, vol. 2 & 3, pp.281-314.
- Mo'arrefī-ye edāre-ye asnād, 1381kh., "Mo'arrefī-ye edāre-ye asnād," in Edāre-ye asnād (ed.), 1381kh., *Dafter-e asnād*, vol.1, pp.287-292.
- Mo'taqedī, Rabābe (ed.), 1387kh., *Gozīde-ye asnād, farmānhā va raqamhā-ye Āstān-e Qods-e Raḡavī az dowre-ye Ṣafavīye ta Qājārīye*, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Raḡavī.
- 'Oṭārudī, 'Azīzollāh, 1386kh., *Tārikh-e Āstān-e Qods-e Raḡavī*, Tehrān: Enteshārāt-e 'Oṭārudī, 2nd ed., 2vols.
- Pasandīde, Maḥmūd (ed.), 1385kh., *Howze-ye 'elmīye-ye Khorāsān, vol.1: Madāres-e 'elmīye-ye Mashhad*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- , 1394kh., *Asnād va mowqūfāt-e madāres-e tārikhī-ye howze-ye 'elmīye-ye Mashhad*, Mashhad: Bonyād-e pzhūheshhā-ye eslāmī.
- Pzhūhesh: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād, <<https://library.aqr.ir/Portal/home/?news/436734/479438/479440/History-Research>> (2017年12月27日閲覧)
- Qatar Digital Library, IOR/L/PS/10/209 : Illustration of the Russian Bombardment of the Imam Reza Shrine in Mashhad, 1912, British Library: India Office Records and Private Papers, IOR/L/PS/10/209, f 344, in Qatar Digital Library, <https://www.qdl.qa/archive/81055/vdc_100032266432.0x000001> (2017年12月16日閲覧)
- Qommī, Qazī Aḥmad, 1352kh., *Golestān-e honar*, Aḥmad Sohaylī Khwānsārī (ed.), Tehrān: Bonyād-e farhang-e Īrān.
- Raḡavī, Moḥammad Bāqer, 1384kh., *Shajare-ye Ṭayyebe*, Modarres Raḡavī and Mehdī Seyyedī (eds.), Mashhad: Āhang-e qalam.
- Ṣābetniyā, 'Alī and 'Alī Sūzanchī-Kāshānī, 1381kh., "Mo'arrefī-ye majmū'e-ye asnād-e rowshanā'ī-ye ḥaram-e moṭahhar va amāken-e vābaste dar dowre-ye Qājār," in Edāre-ye asnād (ed.), 1381kh., *Dafter-e asnād*, vol.1, pp.101-192.
- Seyyedī, Mehdī 1386kh., *Masjed va mowqūfāt-e Gowhar Shād*, Tehrān: Bonyād-e pzhūhesh va towse'e-ye farhang-e vaqf.
- Shahīdī, Ḥamīde, 1387kh., "Dār al-Shefā'-e Āstān-e Qods-e Raḡavī dar dowre-ye Ṣafavīye," in Zahrā Ṭālā'ī (ed.), 1387kh., *Dafter-e asnād*, vol.4, pp.69-102.
- Shūreshjānī, Sālem Ḥoseynzāde, 1387kh., "Barresī-ye dafāter va māli-ye Āstān-e Qods dar dowre-ye Ṣafavīye: Bakhsh-e avāreje," in Zahrā Ṭālā'ī (ed.), 1387kh., *Dafter-e asnād*, vol.4, pp.11-38.
- 杉山隆一 2016, 「イラン・イスラーム共和国体制下のイマーム・レザー廟：同国におけるシーア派聖地イマーム廟の運営と諸活動」『イスラム世界』85号、33-72頁
- 2017, 「アフシャール朝期ナーデル・シャーによるマシュハドの都市開発整備事業」『史学』87-1/2号、33-66頁
- Sūzanchī-Kāshānī, 'Alī, 1381kh., "Mehmānsarā-ye Raḡavī az rūzgār-e Ṣafavīye tā pāyān-e Qājārīye," in Edāre-ye asnād (ed.), 1381kh., *Dafter-e asnād*, vol.1, pp.51-100.
- Ṭabāṭabā'ī, Modarres, 1352kh., "Panj farmān-e Ṣafavī marbūṭ be Āstān-e Qods-e Raḡavī va Mashhad-e Moqaddas," in *Nāme-ye Āstān-e Qods*, 32, pp.143-158.
- Talāee, Zahrā, 2014, "The Political Structure and Patronage of the Āstān-i Quds-i Raḡavī in the Reign of Shāh Ṭahmāsb (930-84 AH/AD 1524-76)," in *Iran: British Institute of Persian Studies*, 52, pp.205-217.
- Ṭālā'ī, Zahrā (ed.), 1380kh., *Gozīde-ye asnād: Negāhī be tārikh-e Khorāsān az rūzgār-e Ṣafavīye tā Qājārīye*, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Raḡavī.
- (ed.), 1385kh., *Dafter-e asnād*, vol. 2 & 3, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e Raḡavī.
- , 1385kh., "Barresī-ye asnād-e zanān-e shāghel dar ḥaram-e Emām Rezā az dowre-ye Ṣafavīye tā Qājārīye," in Zahrā Ṭālā'ī (ed.), 1385kh., *Dafter-e asnād*, vol. 2 & 3, pp.143-186.
- (ed.), 1387kh., *Dafter-e asnād*, vol.4, Mashhad: Sāzmān-e ketābkhānehā, mūzehā va markaz-e asnād-e Āstān-e Qods-e

Razavī.

渡部良子・阿部尚史 2017, 「16世紀サファヴィー朝期のペルシア語財務・簿記術指南書：ギヤースッディーン・キルマーニーの簿記術論文・序章簿記術論校訂・日本語訳注」『アジア・アフリカ言語文化研究』94号、383-485頁

Werner, Christoph, 2015, *Vaqfen Iran: Aspects Culturels, Religieux et Sociaux*, Leuven: Peeters Press.